



60816



伴勢物語愚見抄卷三

し、西院のふりごとく、  
淳和天皇と八遺詔より、  
骨をたてさるなりて、西院の帝とす。



崇子内親王ハ淳和天皇乃ハ女母ハ正四位  
上橋清野ノ如ク永和十五年五月十五日  
の交りとなりたり。かかるといふ  
中將をいふなり。

愚見三ノ

女車はあひのりて

中お女と同車しては葬祀と云ふるに  
あはの下乃色この子まゆしれりし人  
源乃至ハ滝成天皇乃ハ孫揚院大納言  
定の子之從位下左京大夫之順八か  
みり

ごうくたふりあつて

いりり中將のあひのせむる車と女けり  
系多くとちひてそくさあてながめ  
守とすり  
管ととりて女車はいれぬりせり

女乃親とえんとて管と車ぬり入ぬり  
多好と乃人なせとくろやうよひて管と  
源乃袋かた小集あてやちら多りえん  
源氏乃管のまよむつこのとを  
かきんが案

くろなりなり人こ乃管のとしす火やちん  
とせしけらさんすりてのせむる  
くろゆりなり人よ女をいふ此か  
いりりやちんとして管とぬり  
とせし管らさんよなりさて  
んとせりは清なり



梨壺乃又人れうらへ父ハ左馬ノ樹本ニ  
 子これわいさしとん父定のハ乃本さし  
 変うひて至ッ好色の及ろろりして家  
 とととていふ

甲  
 じうしこくまはくこつうしうハあもぬおとぎひ  
 ぢーしうハ下習ゲ品ヒハイヤーとれとら  
 ずうじんぎへぎずうしうハあもぬい  
 人れ子なれしゆじんハまちひまじり  
 人の子ハわづらつれとろるるおれ  
 人いさひひさしとてなり  
 ころ女とをひうり

遊ユの字ニ介へとやま  
 ねとこら乃後とかりととととじむる  
 わていていぬ

大如物神といふしうもまへち乃  
 ものまありまれよなんとかなりわて  
 いぬと母うじとをつれていぬ

出ていまの詩がふまろるかんとし  
 出てゆくりとつひさくハ詩のれん  
 うさくがめいかにいなるあまの  
 かんさうりよりさしといわるは  
 まゆ物さひに教よとあつてゆり

三三

おやあえてしるり

かとも乃終入と今て親あえてさる記さる  
程さひてしをいひしりいともあじしとさよ

親の心は程さひてしを此女はあつさ  
とささうよかやうよ死ゆる程乃とさあん  
よハナもよかやうよハナとおやれよ  
かりりなり

あんならよ終入よさる

あんならハ眞實也

あまの程さるまよあんなや

とろせれ人の物さひしりてさるさるさる

あまの程さるまよあんなや  
あまの程さるまよあんなや

四十一

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

あまの程さるまよあんなや

愚見三

五

是乃花にこふの目とけりは花なり葉本をさるれり  
 此歌古今十七葉平朝臣乃今れ約よいく  
 免のおとすととりてゆた歌今くう人乃  
 さあをさるすとて捨てちりたりとさ  
 是の文にこふとい替りるといあも目とけり  
 目とけりたり之を人ひとりれ替りたりは  
 ちりふふちゆり替人の葉本をさるもさひれす  
 されとさるなり也  
 じう一替のん人ならぬ  
 是ハ古と乃かきし葉よ後人あもれ替り  
 是の一しゆ人よじう一の葉にさるる葉本に

とさそと本歌よりして申お乃替りたりと物換れ  
 作者乃人し一毎の初は是の替りたりと云ふ  
 此奇なる案いひさるめれりことと

四十二

じう一替と色ころもとさるく  
 どの小まらりこととさるり  
 されとさるるさあさるり替り  
 ちりたり將乃字と文とさるん  
 さりたりいそさるさあさるり替り  
 いそいめりそ  
 程もさあさるり替りたりさるれん  
 いくそけりえあさるり申とらふん上の約と

Original 111

あつたつた

出てゆく一途もよまざるにせむらひらとといふん  
好色と知てうらりなり

四十三

若くや乃今ことやと見こかりしゆりたり  
賀陽親王八桓武弟七の子母丈人多治法氏  
三品治アマキてなりゆふ貞觀十三年十月  
八日薨も歳七十八  
人かたし見きてまらりや

申おたり見きては女よ物つひ守りたり  
又人きつきて又やり子親のささくよて  
又うらり人ありと申おつたり

子親なりゆく里乃あきあけ程とまれぬやあつた  
此類古く才三徳人しとれあてなりゆく  
ありゆく也心のあはれ女よあてなり  
こ乃女さしとてなりて

童女とては申おたりささくんとて後れ  
必のさあてて田長けささくなりあつた  
志ての田長いかとまされ異くあてなり  
此等よ今あり古今奇つくはくの田とれ  
ささくさす志ての田長と移さく  
この奇は子親なるとあよ志ての田おて  
ささくよさすゆりいりあつた

四十三

七



あ乃ららるるさあまこあれとつらよ  
うきて後らぬよ多しもなうさされね  
ありと云ふよあてらさくもね田とつれ  
もろとりあうよなて又いりりあまこも  
いなりあや

いりりあまこもねねあまのむつら位里あまこ  
此奇たうしくあかくの人のささり  
すむささあまよとあまらうとねま  
あまのまんと後らなり  
あまこ移く人よむまのえれむまんとて  
あまこ縣のあまらうといふ

家とらし

家童子と云書と云詞々

も乃あまは移ひつささ

裳の腰り新と後て結ひけり也

出て移くあまこあまこねさ移るハ我まもあまこ成あまこ  
我まもあまこあまこ出て移く人よんもあまこ  
やうあまこ移るハあまこあまこあまこあまこ  
さくなりあまこ古今奇電井しあまこ  
ん乃とれ移るあまこあまこあまこあまこ  
此あまこあまこあまこあまこあまこ  
あまこあまこあまこ

あのをさへいづらなりふおかりりたれんぞめて  
よまふすらうよあらうひて

四十五

おやふおなりてきぬへさ時

け女物とさひてやまひひななりてきんぞ  
つれくはあわりとりたり

表鏡いこがらきりなり

よひのあせひとりて

うまへ乃中よあせおたさうよあう  
かとすまじとりなり

四十六

いとうろりきなむら

後撰集才又秋乃部業平朝臣介とくあり  
つぎとをい告とことと云河とすてはわらを  
あやふくと厚よ告とことせよと也

後乃あむらとりりきし世といなりや  
見うろれと忘れぬるお物よあせあせれ  
目うきと久くくぬんきぬと

見うろともかたなりさくはあせあせ  
見うきぬらんちりなり

四十五

祢んはよいくてと行ふ女もさうり

念ひいいてあたまやとさふん也

大ねさるひいひあまうよ成ねまひいひを怒り

古く集才十口積人不知乃そん大ねさは

ん〜下り時どのくまけり物されいひいひ余

多といり男の心多〜とを多〜して後り

大ねさるひいひあまうよ成ねまひいひを怒り

古くあま〜集才十口積人不知乃そん大ねさは

後大ねさるひいひあまうよ成ねまひいひを怒り

きてふ物ありといふ物をのん〜あま〜乃

う〜いひありといふ物をのん〜あま〜乃

後〜ハとゆり中いふん

し〜あま〜集才十八〜を純利真う阿波女

此秋古く集才十八〜を純利真う阿波女

後り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

いひ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

い〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

中將の妹也に〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

か〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り



愚見抄

新巻八巻のこゝてもさきぬらう一巻うゝをを頼むにけふ  
新巻のうゝもく日影をよけて流ゆらもきこも  
あゝなりけををゆのひつふ物にあゝわ  
後り大うゝををゆやうれと頼むに  
ふのあゝをを恨むていぬらう

吹風よまやの梅はらうすともある頼むて人れんを  
かゝるを頼むてあゝ風よまやのさうらう  
ちゝうゝてけままでゆらうてあゝを  
ゆのさうらうを頼むてあゝのひつふあり  
まゝふとらうらう

又女乃起るも古今才十一張人あゝ乃頼むたり  
ゆゝもあゝ頼むていぬらうなふもあゝ乃頼むて  
亦如益水益水随書随書随合随合といつらうゆゝをゆけ  
うゝはゆひてやうてゆらゆらゆらゆら  
敷の文字をくもゆらゆらゆらゆら  
頼むらうをゆらゆらゆらゆら  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆゝゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
又頼むてゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

後ろ務と此方三乃拙いつ連と人れあま  
とらうひてと申ぬものもれえつれまこと  
いふこととせんとも後ろ也  
あつらうと申うう一乃り様と申乃あのみあつら  
しと申ことかろ後ろ

あつらりことと申うひつらう一あつ  
らと申乃あつらも又と申よあつらあつら  
なれらうらうへしと物うらうれ作老筆と  
くくへるもり也

み十一

うへつらあつらあつらあつらあつらあつら  
古と集才五款えうへつらあつらあつら

み十二

うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつら  
あつらあつらあつらあつらあつらあつら

五月廿日乃らまきと申色の糸とて四い  
らあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
うらうらうらうらうらうらうらうら

あや免うり天ハ派を海にひかり我ハ控へてうら免  
あや免うりハちまきと申うら免と申  
派とあや免と申進で派ハ控へておと  
あつらあつらあつらあつらあつらあつら

又十三

又十四

又十五

又十六

又十七

又十八

いうてういふも乃昭ん人ふ道とてふんは海に流るるや

亦乃んうられぬるは

行やぬあらしとあらしの夜は元は空なるあやと説

後撰集乃骨五よきあらしとをゆふとくたり

春ハ空よ紫陽花のなりり長くはよとてあ

なまきと元津室なるふとふなる也

心と心ありしとて先と云ふれありしとておれなるは

人の心とてしとて先と云ふれありしとておれなるは

けいおれなりしとておれなるは

我神のま乃唐よりあらしぬたらしぬあらしなり

あらし海とてあらしなり

志とひねる乃りりふやとてふ家とてあらしなり

見れうら先の正かとよ付あらし小きひのやう

かり物とてあらしとてあらしとてあらしとてあらし

五なりや也海藤ハ雲のうら物とてあらしなり

あらしのうらふしとてあらしとてあらしなり

心流るて文好とてあらしなり

心つくとて人の心とてあらしなり

そこれとてあらしなりとてあらしなり

桓武天皇乃皇女あらしとてあらしなり

あらしとてあらしなりとてあらしなり

あらしとてあらしなりとてあらしなり

愚見抄

古

お中なりとれえ田うらんとて

うらお中な進んそふ所乃氏の田うらんとて  
ゆつしとくひうらうらとふいふたうら

お乃おとこ乃ありとて

葉平の母侍登内親王八桓武乃所女うらて  
長器よ位ゆれんかの所うら中おたうらとて  
うらひうらなりなり

若うら若れいくせの若るれや位々ん人れと所進ん  
古と集才十八後人不知の亦やなりとてハ  
じうの京も進ん若れいくせれやと後り  
位々ん人ら中おといなり也

若うら若れいくせの若るれや位々ん人れと所進ん

うら進んたはう進んり此也かうう進んたは  
すうく若若うら中へう進んり此んちうら  
後りうらハ女こなよぬ祿のハ又普通す  
うらとて女と鬼とハいつうすうハ集南と  
云んこ上の約り此京よわのりなりぬて  
思塚とくふ所り重之う妹般多きとて  
平の急感う進んりうらぬく乃わらぬ條の  
くうらうらうらうらとてうらうら  
拾遺集よ入りうらうらとてうらうら  
あきうらや思塚なりとてうら女ん人けうら

愚見抄

廿五



物分進しとく多し人あつたや

こ乃女としかひろんといひたれ

上は田うらとつては藤穂といひろんといひ

打しひて落やひろんとさし海をいれし由つては西の

かひろよひいひ人を云田はくは田乃意也

六十九

後撰集乃才十五は巻中をさひうてなり

ひら乃語りや 任まひぬといひ語り乃さきと

爪末あつへふ中もと免てん かなしうれ

四乃直説まといつても本款ははねてう語り

後成りや 任まひて身とくす人さ山さよ

あさうらうりかふた乃月れ となして爪末

後成りの松子代さ八とれいのりれ

くして物いさくやまてあまといひさるれ

急乃やまひとて身をあらう月をく入あひ

うりよ終りてと上よく多り月時のと也

かりてよあうさきなとていさつて

蹴うよ 網路すう人よハ行りてよあをせけハ

生うへるといり法華経は冷水灑面といはる

事ながらなり

我うへあうとくならむ乃川とわらふ乃少いの家

古と才十七後人不知の奇之かりてよあ

愚見抄

七

愚見抄

卒

昔くくともううへうあつとくとふりうとふり  
 後をわらふ也  
 昔れとこきかりあつていふううくくも申あす  
 きりうらわかとれ家さう  
 此れとこ交つてよいと申きて女乃あひ  
 らひもあつてうきりたれも此女あひり  
 こそくあひておのあへつてうらかり  
 女乃おとここのけういよてくれあひささかり  
 筑前国宇佐乃ハ幡へ一代ノ一度勅使とま  
 らるるさき此かところ乃つひとけけ  
 ううてつうへ下るる也

ありあつてさう乃官人れあつてなんあつと申て  
 或はとはつうへうう改乃あつて根兼官人  
 とハ勅使を申へさうとて彈家（たづね）の報復と  
 う言ひなりをこそあつとてそれ官人  
 とはいふなり  
 女あつてよかりうとてさ  
 女あつてとハ人れつてさうりうとてさ  
 酒とすじろとて砂をえとて也此女ゆ  
 へく人れとてさういひ物とてさ  
 二月も横乃うとてさういひ物とてさ  
 古し集才三換人あ知乃なり也

といひやうしうしひ出て居たりて山くひり  
あつらゑ

此女も乃おとこよあひて好ましくあひて  
居たりて山くひりこりもや成説く小野  
小町大に惟章の妻となりて筑紫へ下  
りて後より居たりてとに玉用寺乃  
あつらゑもさ守りて山くひりといひり  
相多つねなり

そ先河をさふといふそふ家よりちておとこはさん  
拾遺集の才十九よき深河の筑紫はよ  
あつらゑ所々家このいしりよさふものとさふ

うらなり人れいひやうあつらゑりて先河を  
さふりあつらゑりてさふりてさふりてさふり  
なつと女くあつらゑりてさふり也

名くあつらゑりてさふりてさふりてさふり  
風流の肥後あよきあつらゑりてさふり  
先のすむとすしあつらゑりてさふり  
あつらゑりてさふりてさふりてさふり  
は乃あつらゑりてさふりてさふり  
とはりてさふりてさふりてさふり  
ふ川くさきて人れんとさふりてさふり  
あつらゑりてさふりてさふりてさふり

愚見抄

卷四

ことごとくして傳衣よて了せあれと陳し争  
 弁かり後撰才十又朝經朝臣弁  
 向うるれとあふぬぬ多ん傳衣り口は  
 傳衣よして此弁乃らうらうなつ里又同  
 才十九後人不知の奇名りれりあつて  
 ちふぬこれ傳衣なれぬ事さぬいふせさつん  
 乞ハ物さうりの弁と大略かういふさう  
 うくれり也  
 三三  
 もとより人れもいいてさうて  
 ことごとく人の中おを食物のけいせん  
 し争りかり

乞ハ物さうりの弁と大略かういふさう  
 うくれり也  
 三三  
 もとより人れもいいてさうて  
 ことごとく人の中おを食物のけいせん  
 し争りかり  
 乞ハ物さうりの弁と大略かういふさう  
 うくれり也  
 三三  
 もとより人れもいいてさうて  
 ことごとく人の中おを食物のけいせん  
 し争りかり

愚見抄

卷三

なり多れも忘れず衣裳とくをくれ  
るらてとくしけりやう

三  
いしよらつたりせ

色好のんけりといふ也

さふらぬけりけりあさん

之昂はあらいすうみ

さいこ中めり

在立中めると葉平を云在原氏にて阿保  
親王乃才女の男多れといふ也

百とせよいしよらつたりせ

此女はとくふ九十九歳といふ

年のより多ると云現つくと海蔵のり  
老之れ髪のみ多れ多るとをよみていふ海蔵  
ものよりよりその海内内のつれ多れといふ  
いしよらつたりせ

いしよらつたりせ  
かへつらつたりせ  
よぐれと及しけりといふ  
多れといふ

たすおてぬとて

ぬとぬらかり古今集つたふ人をや  
秘くは露乃とくといふ

愚見抄

三

さむらよ衣うそしはあふしやまゝとて人よあそめ  
 此芥乃るくし先れ三句ハ古ト才十四字注  
 格姫のくろりそとあき  
 以人ぶあそと行そぬとそら先せぬさ  
 はんありそ

そら先ハ駿乃字なりまろしをぬんきり  
 ぶあ人としおそぬ人とし美あそそ  
 畜けら先そそあそそ

いしおねと女くうふくうよとせさう  
 それんいつくなりんあやしきよら  
 いさうまあひさうそとせつら

本五

あらし志く次あやしきよんをそんそ  
 傍て女乃くそやそらなり  
 じうか何やそありてつらうあ女乃あゆ  
 されぬらそ

以女ハ典侍藤原直子と云人也深夏の宿  
 所いとこ也そり門乃ハ氣色くて交を  
 持らされぬり女ハ人のまぬら凌穢おと  
 ころそハ禁色と持らさうくと云

かふそやもんそとていすけりうらいとこ打り  
 大ますんはとハ深夏宿とそ  
 女く持らされぬら

愚見三

三

此中の中へ移りされてありしを  
女といふは身もあらひえん

くは片輪の女乃さばなるを  
身とてしるふと云

ふまはあつと我まけたるを  
いよ志のうんとと人ともか  
え悪くればいふよくい名と  
かりしをささもあつたあれ  
といひて

曹司ハ女房の御つり  
あつたれん

きい乃これとさうしよ

例の此ハ中ねを例乃此人と云  
されたるは乃とさうしよ

此女里位すれはれはれとて  
又さくゆくとされはのうら  
あてあつた

このもつり乃さうしよ

主殿司の女嬪之殿上なと  
そはすけ乃里のこるとれど  
このもつりなと

くはとりてがらよかなを  
申すさうら皆とよつら  
てうらな

Original  
三三

愚見抄

三三三

入るるこのありの女乃而へつと云也  
くくくくくくくくありありあり

えりり下ハ男の心をいふ也

急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ

後乃具ハ人取と云ふ事やうけ物也かも

川へもももももももももももももも

急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ

古と集後人不知乃予ハ邪ハうをす也なり

急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ

ころころころころころころころころころ

ふよいよとていふ急ハいと急ハいとてやうふと

清和御門乃以夏也三代實録ハ風姿甚美

端巖如神とみし多りくくくくくくくく

ゆしりく急りりりりりりりりりりりり

急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ急ぎ

急岩山麓急尾と云所にて修行をさせ給

なりさて急尾乃以門ともや也

くくくくくく

宿世ハ急を急世の急り急り急り急り也

ころころころころころころころころころ

業平中將流罪之夏国史ハ不見りこれ急

急り急急急急急急急急急急急急急急

愚見抄

三三三



まゝあり或説ふ東山はありりわらわをかく  
つよとどり

ころ女のいとこれやとほ女をいぬくてまきてく  
おきて志何うもふたれん

深ま宿乃山立所をぬくてまきて此女を推  
おきてまこれありをくくまこめてとらり  
くく物とお免をくまこまりりといふ人  
ゆいじろこととらり也

響乃うらもふすむち乃我くとねをくやならあせをいぬ

此歌古今才十五典侍藤原直子朝臣乃言也  
くばくまらまをくまらま

かりされ多り下りりく歌を云ぬく流されまむ  
あやましくまをくまらなるくくあまて  
つくまらまらあへ

まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
女乃くくくくありりて流り也

いづまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
古に才十三讀人ふ知乃言その人を及ん  
まらまらまらまらまらまらまらまらまら

六

伊勢物語愚見抄卷四

いづくかこはるみしるあうとこりありきりよ  
あまかこくを多しひきかへ

中將の連見校へ行平守平仲平之

取はつとげさかきいり浦と小きやいせとつたうみ

後撰才七よき守さかきとくふおとらかり

とけいお波をまよきうこもりういせよせ

あまもりんこをしと海しよちもつた也

六十七

さしきりしよとつたういりつたう

せしきりし道遠とくあまふしよきし古葉

才七の初かしくりしよとつたういりつたう

いふも川あせひなりさふらひのさぶらへ  
くいつり祿の歩もつうなまらふんせ  
くゆりこもれ

山ぐらうりほをれつとらせ

ふれふらふり喜まひくろあは花のやーをうらへ  
くろふいくろやせやうのふいこぬもまひ  
せろもれもろをくろふとまやうられもろや  
むの梅の枝くはもろ言のまこむれ梅を  
せぬねろこてうろれまろよくやあれとろ  
かよせろこをけて流るこ

六十八

厚明て菊乃むこ枝あれまき海へ信りし流

秋乃んら尸かふて菊れむさくぬり何かも  
かきろろれれ位ろの流るまのろろ  
又とろろわく後

みまふよまふなりまろり

中ねのそよよふまろれえ皆えんやく  
あろろ

六十九

停せろふろかまのつひいさききりよ

国史よ光孝天皇元慶八年十二月二日  
勅使左衛門佐從五位上藤高經六位四人  
近衛一人鷓七聯大九遣於播磨国  
中務少輔在原弘景六位四人近衛一人鷹

愚見抄

二

五六六遣於義作国<sup>ニ</sup>並擄取野禽<sup>ヲ</sup>

仁和元年三月七日遣從四位下左馬廐藤  
利基於遠江国<sup>ニ</sup>

左近少將源湛於倫後国並臂鷹鳥提大行  
掃野禽路次往還并經彼之間用正統供食

同二年二月十六日遣越前權从藤垣衆

雅樂及從五位下在原棟梁於倫中国並

責鷹鳥鷄拂取野鳥云々

將乃つゝいへ鷹狩のつゝいへ業平けつゝいへ

く定給りて伊勢へ下ありて国史院文

々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

かの伊をれ安定なりやう人のかや

怡子門親王の女徳天皇の御母八正四位下

名虎の女紀静子といひたり惟喬親王と同

母なり清和御宇貞觀元年十月安定よ

るまふ十八年して伊勢を返かへりて

延喜十三年六月八日薨とてりて業平う

み師尚といひり此安定の肢也師尚高階

峯緒の子よかり系畠なりて高階氏よ

りさるり此謂きよりて高階氏の人を

伊勢乃神宮より伊勢の女を

かへりて伊勢の女を

多かりしりて也

首書

在立中将安密通して師尚と生さる事  
江家次才の才十四歳にして多り是よりして  
高階家ハ于今修勢へ不泰と云

世にまふさせたり

こゝろ坊々りといふまゝくしむると云

ねんふらふといふまゝなり

つとくハ勞し秋身ハ勞もつとくといふ

さひつとくハ人といふ也

ふりつとくハ

月のつとくハふりつとくハ

下着して二日といつて下は月朧なりといふ  
月あり何れ也

まれてあそんといふ

まれていりまゝしてあそんといふ

全系集永実壽 二日月ハかゝるまゝなりといふ

まれてまゝなりといふ

まゝなりといふ

まゝなりといふ

まゝなりといふ

つとくといふ

さゝの器ハ中納乃勅役といふ

祿ひとらえりし

一町を回<sup>こ</sup>廻<sup>り</sup>よとくしてつる子ひとけみ  
一廻<sup>り</sup>下<sup>り</sup>乃<sup>り</sup>う<sup>ら</sup>らと丑<sup>の</sup>三<sup>廻</sup>なり

月のおりらかり

将の役の二月三月の例あれも月のあ  
なりといひるの言の時なり

ゆいあふもつこつぬよ久<sup>ま</sup>まなり

実よりなきといふら但祿意はけりて  
あつらよいぬよや或説は一板のた  
あつらなりて昨尚とゆふなり  
とつらゆい<sup>ら</sup>知<sup>ら</sup>る<sup>も</sup>也

夫やわ<sup>ら</sup>我<sup>が</sup>行<sup>く</sup>ん<sup>は</sup>り<sup>し</sup>や<sup>り</sup>す<sup>ま</sup>愛<sup>り</sup>現<sup>る</sup>ね<sup>て</sup>る<sup>ま</sup>て

古<sup>し</sup>才<sup>十</sup>三<sup>よ</sup>を<sup>も</sup>母<sup>を</sup>愛<sup>り</sup>かり<sup>る</sup>人<sup>の</sup>ふ<sup>ら</sup>り

より<sup>も</sup>なり

うさ<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>や</sup>も<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>愛<sup>り</sup>現<sup>る</sup>を<sup>も</sup>完<sup>た</sup>る<sup>ま</sup>

乞<sup>も</sup>古<sup>し</sup>今<sup>も</sup>も<sup>も</sup>裁<sup>り</sup>多<sup>し</sup>業<sup>平</sup>約<sup>長</sup>并<sup>し</sup>を<sup>も</sup>か

を<sup>も</sup>乃<sup>り</sup>人<sup>なり</sup>

必<sup>ず</sup>の<sup>り</sup>い<sup>つ</sup>さ<sup>ら</sup>乃<sup>り</sup>愛<sup>り</sup>る<sup>も</sup>を<sup>も</sup>

伊<sup>勢</sup>乃<sup>り</sup>国<sup>司</sup>も<sup>も</sup>母<sup>を</sup>愛<sup>り</sup>察<sup>の</sup>け<sup>り</sup>も<sup>も</sup>人<sup>也</sup>

も<sup>も</sup>あ<sup>い</sup>も<sup>も</sup>え<sup>て</sup>

も<sup>も</sup>あ<sup>い</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ひ</sup>て<sup>も</sup>物<sup>も</sup>え<sup>い</sup>も<sup>も</sup>なり

から<sup>ん</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>も</sup>ぬ<sup>き</sup>ぬ<sup>え</sup>り<sup>も</sup>あ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>り</sup>て

愚見抄

五

丁橋のちり

こいつぎやうの上の白とらひ切らぬなり  
それとぬきぬえとぬ清さんといふ  
いへてあつたなり

ついで乃てうしてさうす急とらひはく  
ついで乃ていねやぬとけと又普通なり  
さうす急とらひはく

又あふさく此園もあつた  
清さんといふてえあんとて来へるなり  
お飯の用とて又あつたなり

七十  
お飯の用とて又あつたなり

伴路乃函の名所なり

いつこれや乃ていへ  
母定まぬつうの童女なり

その終るるをいついせさかして我も  
あつたなり母定乃はとてあつたなり

帯乃初母のいへとあつたなり

七十  
乃てあつたなり

丁橋のちり  
母定まぬつうの童女なり

ちりやうの終るるをいついせさかして我も  
拾遺集人丸弄 女子振袖乃てあつたなり

拾遺集

愚見抄

とハワリ身れ行しきくもなり 上乃三夕月  
まれちり大交人の言れ上人と云申ねる也

色くいさてしきしき子孫孫のいさじりたがきよ

男女乃乃ハ伴誓諾伴誓冊乃ケキ始マり

八百萬の祚も禁止スり乃乃あくすく云ん

七十二  
伴誓乃言かりたり女又えあえてとかりれあへ  
いくやして

女ハ母交とヤとらりれ言ハ尾張也

大渡乃相ハけくくもあきくまうし子てのこもる波

相を人をもりよせへありまらとらりあきり

つらりへあきりし子てのこもるとり

七十三

光り公てよふいさくきぬ月のらけつれとよき

月乃うつろふきとふれとよきとれぬこと乃

あきりかり

七十四

岩のあきりかりしはなしてねとあきぬ日多く志

此歌一万余よき又拾遺集よと入あり

七十五

じりしはなして伴誓のあきわていさてあきん

いひたれん

井てハ居しいさてあきんハけてあきん

大渡の浪よしてふらりあきんハなきぬとらり

なきさきりハ空乃ふれありと云又海乃れ

波のあきりし田かりたりとらりあきんハ

愚見抄



日本書紀  
卷三  
三

つりふのなをさぬ心のちられぬらと  
いふ人つ返にともいひつゝくとも  
多れと先んぬれぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと

神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと

岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと  
岩のこゝろをさぬらと

心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと  
心のこゝろをさぬらと

神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと  
神のこゝろをさぬらと

ふしの神

七十六  
じう二条后乃ゆきま交乃子やまのりけり  
うら神のゆきてまひ多路り

氏神ハ大原乃神古と集才十七ハ大原  
野ハゆきてまふとくクケリ大原野神四座  
春日神社と同躰也雨院左大臣冬副公ハ  
勸請かんすうマされ多りそれより此ハ菟氏の后官  
りゆり行啓ぎやうけい乃夏之二月の上乃卯ノ日  
十一月乃中ノ子の日祭のとき文徳天皇乃  
仁壽元年よりゆきまてまありまありハ  
藤原の后官より行なむり事ハ也

ふの湯つうさよさあひさるにされ

葉平ハ貞觀六年三月左近權サ將任ス四十歳  
乃年也

大なるやまの山もろくやまの神代のもよひの  
ま日大原野の才三ハ神代ハ菟氏の祖神也  
ゆきま神代ハ天照太神と誓言多事  
ゆきまを神代のおとより下のみハ二条后  
いままゆきまゆきまゆきまゆきまゆきま  
くゆきま大和物語ハ此等のゆきまゆきま  
ふゆきまゆきまゆきまゆきまゆきまゆきま  
葉平ハ供よさあひさるにされ

中りて多くなきし頃といふ事ありやゆふと公に  
らりてとてしと物なり乃作者のいつ  
ことはかり

七  
いしう田じしれ今とてやういかにゆふ  
の河乃ぬれをうきあといふまをうりたる  
田村清門とていふ文徳天皇はたはた田邑此陵  
おとちをりしりし常て田村のうといふ  
藤氏多賀幾子の右大臣良相乃て女と嘉祥  
三年七月は女御は立て天安二年十月  
十四日卒今ゆをうりけるといふ河のかり  
しりし事ありとあるしきと

それうをりてあ祥寺にてみえさうたり

あ祥寺は東寺乃弘法大師乃弟子真雅僧正  
多てられぬりい誦をこなりれたりや

くくくく物をしてまはるたり  
さく物ハ捧物也

らくく物ハ捧物也  
子捧也

本乃名はよつたてぬれ人よきてぬれ  
いしうハ指物多らなれさよはけらるる  
そのせよハいしうてうらぬり枝よけり也  
山もさくく物なりはまはるくはいてしりやうん

愚見抄

十

みくせ

さくけとれ丸や堂乃并よつゝありつ山の動  
出ありやうりつゝせりなり

右大納言いさそりけりあらせり行や  
中いさそりて

坂原の老行ハ右大臣良相乃一男女御いせ

貞觀六年正月十六日叅議任ス同八年十

二月廿六日右大將ヲ兼ス年亦一いさそり

とはさしもいさそりつゝつと云同し記詞

右乃いさものつゝなりかされ免いぬりいさそり

業平中將貞觀七年三月右馬權下任ス

目ハ多うひなつゝいさそり物や山とみそり  
なうり後り也とて右乃河の一向は山ようで  
より免り

山乃いさつゝてなすあかといまれれとてさり

いさそり河の堂の前り山のうこまおり

つゝいさのいされと女河乃中後のもろ三月れ

す急よあうりやとと案は女河ハ天来二年十

一月十四日は卒スル後官傳いさなり

いさそり免り免き常行大納言乃右大將

任ズル 度貞觀八年十二月業平右馬下

なりぬりも同しと七年のも也物ハ此

女御乃卒むる貞觀八年以後の事成へ  
下ノ段は女御のなごむぬりの伝ふを云は  
右大將常行と云々葉平も右のいふは  
裁多り此後ハ同時れと成へ又まゝの事  
云よよれも女御乃中陰のつらむ三月の  
末よあつりて篠筵とのへつらよやふくわ  
つかなき事なるなり

と云ふ事ともあつらひたりそのういふれおほり  
せんあそれりたり

中納の之後よれもよふもあやうな  
そ何よきよ増きりなりなりなりなり

七  
んしつりたり

山と云ふ乃せん一のそかろすすれ山と云ふの後

人康親王ハ仁明天皇弟也子母ハ女御也

澤子總繼り女也四品彈正尹と云貞觀元年

五月入道しり同し十四年五月五日薨

年四十二山科宮と号スきりりりりりり

入道と禪師といひりりりりりりりりりり

貞觀元年ハ女御の卒ラ天安二年と云夏

あひらりりりりりりりりりりりりりり

ゆりてりりりりりりりりりりりりりり

常行大將の山科の宮へありりりりりりりり

三

三

より乃かまし乃海しききせきか  
にましハ座席之板のねとらとまらる  
かの大船いてゑんりり流るやう

ゑんりりいんとすうとん

三條乃かみゆききし時きりくよのふ里の橋  
まけりいとかりらふりしめてまられ

常行大將の父良相とい西三條右大將と稱す  
西三條の亭へ行幸きしよや

かほとゆき乃後めてまらりしういあり人乃  
さうし乃まのえそよすへりしと

此石を行幸の後此門へめてまらりしと後

戒人乃處此岸のえそよすととれしととる  
崎おのともか夫なり

山科のまハ石めてまらりしと好ま  
あむとまををささきしととる乃くよけを  
つきてめてまらりしと

昔とささきて蔭繪のうよ石乃上よ梅を  
るりなりしれよ申乃流りきをつとる

あうのともいしとあふまにねんとまらりしと  
乃乃んま此岩ハんりあそひとも色にぬ  
なとこのかとも今せまらんまらりしと

愚見抄

三

愚見抄

十一

若くして之をなすなり也

三九  
ひう氏のなりふにこしめられり

清和帝九ノ王子貞数親王母在原中納言  
行平の女也貞觀十六年誕生を延喜十

六年五月十九日薨ス歳四十三と云ふ事  
此親王と業平朝臣の子と云ふ事

此おほらるるなりける事なり

業平ハ行平中納言乃其をたておかしき事  
我よりよらひろあつたけと云はまはるる事なり  
ちりろの事なりハ尺をたてたり本の陰乃  
きこととちりろと云ふ事なり是の事なり

事と云ふ事なり是の事なり  
んと云ふ事なり是の事なり  
事なり下より云ふ事なり是の事なり  
おかしき事なり也

十  
ひう氏より云ふ事なり

中納言の事なり

おかしき事なり折つた事なり

古と集り二業平朝臣乃其也

十一  
ひう氏の事なり

源融ハ嵯峨天皇弟十二乃其子也貞觀十四

年八月亦五日大納言より左大臣に任ス年

愚見抄

十一

愚見抄

廿

五十一仁和三年從一位寛平七年八月薨  
七十三河原大臣ト号ス  
かゝ海乃いとりよ六条とくろりよ家といとけり  
ろくけりて

河原左大臣六条河原といふ家此よりて  
池とやりありて毎月湖吹石とくろり  
とあひ入て海産乃魚貝等とす  
ろりのあ垣とせりて  
ろりよとめてもてあつとせりて  
六条院と云ふ  
そこのまをろりよとせり

つらぬの佐神乃らよ中將のこゝと国史よ  
辨負周羅なりとろりよを

いふとて六条あつとろりよありて  
かそれとろりよなりとろりよを

塩の海といつとろりよとろりよを  
六条院の池とすろりよとろりよを  
後りて大長とろりよとろりよを  
天海とて塩とろりよとろりよを  
とろりよを

ろりのくろりよとろりよとろりよを  
あやしくありとろりよを



愚見抄

十一

とくろくくお同くうたりまうううく六十ふあく乃  
かりお壇うゆとつふにうううううう

我々の志ろく一先日本六十余列乃かりお  
奥列の壇うゆよなうふありうううううう  
友よ河原のおとくもうううこおあかたれい  
うけられぬり中おも奥列へ下りておん  
まよとまよまよひまよひて壇ううううい  
ううううんと後ろやうりひうううの  
まよまよまよのまよまよまよまよ

全

ひうしられぬり乃うことまよまよかりし  
山さされありまよまよまよまよまよ

惟喬親王ハ文徳才つは子母紀まき静子名虎とら  
女ハ貞觀十四年七月出家一後小寛平九年  
二月廿日薨ス小野宮とマスなせ瀬とマ  
亥ハ後多我陀乃仙洞せんどうまかまよまよまよ  
そのあまよまよまよまよ

ゆうてひうしかりまよまよまよまよ  
ひうしのまよまよ右馬うまかなり人といひ  
つて入て実名まことまよまよまよまよ  
おまよまよまよまよまよ

ういれんまよまよまよまよまよ  
特ハなまよまよまよまよまよ

愚見抄

十一

うらむ乃がさよまの家そのわん乃さうさあふ  
おかりう

河内お変替りく瀬のまなまされ社まて  
くん乃うもこれうさうさう

上臈中らう下らうの人た皆そを後り  
を中よ経てさうれなうりまふんをのけけう

古と集才一まなまはのわんよてなりひ後り  
うさうありまての三字清濁のうさま  
よりてさう乃らあり

ちれいやんを極はてさうれう世は清うひさかへさ  
世時又人れ後りまて古今やまあまうらうをてに

さうさあわりてせ中よそのうたれ

此方とん約かき一ねえはてままの約これ  
を乃後りは後へうう

かりう七つ巻の中うんて乃ううはあひさあ  
さ乃らる前乃約りうあり中ねわうては  
くやうまやましく中ハ後人う後りうん部これ  
うさ古し才九旅のうまま

一とまひまひまうまては若う人あわら  
けそかきう古と集よ裁ありひとま  
てうままうまハ彦星と云ゆてハ待ん  
一説られぬ乃まこのまうさうままうと  
かり

まのりまていひのり

ありまはしる月のくくく山乃もりてつれ  
いそ古と才十七よき月よ今ことときとて  
とてなて奉もあひいぬらん心のさきい月のく  
奉もあひいぬらん心のさきい月のく  
かまひいと清り

八十三

花とて葉川の花とて葉川の花とて葉川の花とて葉川の  
中好乃こよひの安よとて花んとくまふとて  
後乃す之秋のんい葉の花と川花ひ務のと  
とて秋の花乃たふさともさん清とくまひ  
此の三月のつくり乃こころれんくく先

式子内親王乃忘れや葉と葉よ川花ひ  
りね乃花への花れあや乃と後乃くも  
此乃とさなるよ葉川花とくつて花と  
いとくも花と葉をけりなり

ふかひよのあひてあひまてさり  
かかたれあひらふわらもとつて寝ぬひよ  
あひらんや

あひのかうまはく一わうくまてさり  
文徳才一乃花子なれし儲乃夫よ成花  
へまき清和乃くまひし引あふられま  
いとさのかまならとなつり入るま

〇〇〇〇

くまの貞観十七年七月の事也

みひろよゆうてくわうとてまつらよ

此室なり入るしてあゆりわり西よむむを

えく寛平の此門乃仁和寺よゆます西よ

此室ととりかむひのぬすらこと也

なれてい愛しとてさあひを言さるてまひん

此歌古今集才十八よき前の詞よさひの介

かりととりんかり又ひえ乃山のさうりぬれい

言つとまうくとまてまらま

八十四

身いりやいさう母さん文かりをる

葉平の母伴登内親王の桓武皇女しうりうをよ

宮と云り貞観元年九月は薨ス

いとつこよまありけれいとくうしうしああり

中乃兄行平守平才仲平かともあきし

やうとてあれもなから中乃をいへく母れ

さひまうらよま常ていとひことなまり一子の

ねいとたをりん

さうらとてゆらうりよまのいへては文あり

とつこいさうまらこまをいかり

老むいさうぬおまはれいとつこいさうまら

さうぬれい不言ふえ志わらこまをい

人間はあう人のれうまえぬこまをい

〇四十一

十七

愚見抄

神

を申さるゝぬあ乃たぐもれり代もつゝのく人柱のま

八十五

此二その乃古今集骨十七よき

唯高親王とマス申乃日とこれ時よ案  
なれつゝまらつせり

ひ月よりなまらつせり

小登の正室へ正月、とよありけり之上の姫  
つゝかきしと也

ひつゝつゝつゝし人をくたつをんしな

僧俗とつてつゝ子よんをつゝつゝつゝ  
くは皆正室よりありぬり也

ひ月がれとよぬいとておほきさほひたり

おとつゝつゝとよとつとつゝつゝつゝつゝ  
まあきしほとつゝつゝつゝつゝつゝ

昔こがつとつて

両言かとのつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

せくとも身なつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
此々のんらつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
あつれとまつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
おひひつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

愚見抄

三



あつ能授<sup>せうじ</sup>といなりや

は男か<sup>おとこ</sup>もや此<sup>こゝ</sup>へい<sup>い</sup>たれと  
な<sup>な</sup>りく<sup>く</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>人<sup>ひと</sup>こ

と乃<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>乃<sup>の</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>なりたり

在原行平貞觀十四年八月廿五日奏議して  
左衛門督<sup>さゑもん</sup>督<sup>とく</sup>は<sup>は</sup>摺<sup>すり</sup>ス<sup>ス</sup>五十七<sup>ごじゅうしち</sup>同<sup>どう</sup>十五<sup>じゅうご</sup>年<sup>ねん</sup>督<sup>とく</sup>と<sup>と</sup>ハ<sup>ハ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ウ<sup>ウ</sup>

と家<sup>け</sup>乃<sup>の</sup>も<sup>も</sup>人の<sup>ひと</sup>海<sup>うみ</sup>乃<sup>の</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>ひ<sup>ひ</sup>あり<sup>あり</sup>て

河<sup>か</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>に<sup>に</sup>知<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>は  
中<sup>ちゆう</sup>乃<sup>の</sup>館<sup>たか</sup>る<sup>る</sup>なり

い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>こ<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>山<sup>の</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>は<sup>は</sup>滝<sup>たき</sup>今<sup>いま</sup>  
の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>ん<sup>ん</sup>とい<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>て

い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>を<sup>を</sup>多<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>約<sup>やく</sup>也

ぞ<sup>ぞ</sup>乃<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>此<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>なり

滝<sup>たき</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>こと<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>も<sup>も</sup>す<sup>す</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>也

あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>ん</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>は

海<sup>うみ</sup>乃<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>也

い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>て

い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>也

と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>て

滝<sup>たき</sup>の<sup>の</sup>白<sup>しろ</sup>む<sup>む</sup>が<sup>が</sup>小<sup>せう</sup>楸<sup>しゆ</sup>子<sup>こ</sup>栗<sup>り</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>か<sup>か</sup>き<sup>き</sup>也

我<sup>われ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>す<sup>す</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>ん

行<sup>ゆ</sup>平<sup>へい</sup>乃<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>乃<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>なり<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>なり

愚見抄

三

ふりくらんていしつむすのいせりといふらん也

ぬいさるらんやまきし口む乃海くくらる神のまに依  
古と集才十七葉平のちかりぬさみくらを  
むといとふぬさらしし海り也滝乃さうむと  
神の海しりもくんでいせりし

くらんくらんあふくもやありん

はらわいせれあらくてかうくはらあふらん  
入真しあらん也

うさう一文内むらうくくらの急のまらんらん

け人の家もそれ海のまにれあらんまきまや  
くくありのりしはな乃常くまのけこの海れくあ

星と常いあらんなり

つよめてその急乃先のみまらて

けとめていあもまとの急也先のみあめ

そのくくもあははまらてあはとあはひてあか

高土器といつらまてつらてまの急のやう

かりまのなり

お田け海乃かきしはさしはしはあひの急くあふらんあはひ

いさる海はうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
さすくく海雲の岩より生れくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくく古とくくくくくくくくくくくくくくくく  
白船乃波りてゆくくあらんり波山



是ハ波の心を海のかさしとらりかき一は  
 いふつ只つとと云初なるなりかき一は  
 心も塵とつと云ふなり也或説いふもハ海  
 吳名とらり物といふつと云ふれハ海  
 身ハ一と云ふなりハ一と云ふなりハ南  
 風よりきりぬれぬと云ふことハ世ハ  
 なるよと云ふなりと云ふなりハ

おならん人れうとてハあはれきりやあはれきりや

八十八

あはれきりとはあはれきり也あはれきり  
 大なる月とて先てしむういつりぬれん  
 古今集才十七二月とて先てしむういつりぬれん也

卒九

又先てしむういつりぬれん也

人志れとつと云ふなりハあはれきりぬれん  
 先乃らん人志れとつと云ふなりハ  
 神の多しと云ふなりハあはれきりぬれん  
 神ハ虚名といひつと云ふなりハ  
 花ぬへきと云ふなり也

九十九

さうと云ふなりハあはれきりぬれん也  
 神の多しと云ふなりハあはれきりぬれん  
 如の字也あはれきりぬれん也  
 一と云ふなりハあはれきりぬれん也

九十一

行先とて先てしむういつりぬれん也

愚見抄

三十一

九十二

後撰才三後人不知乃予なり

あゝくそをりしと再いこう多ひりるらん知人もたご  
多きくー小舟ハらひさ記舟と云く舟れま  
とて舟の左右よりえんのやうの板と舟つ堂  
多り物乃ありが小舟よふなをいぬたれよたなり  
と舟とつりり一方葉よの棚いしやう無小舟とかやり  
古今集 塔にわく多きくーと舟あさりり  
かろー人あやきとつるらん何かろー也  
いとよなふくとさひくけ多り

九十三

よるさひ二かなき也多くひかまて人と云く  
あわれくさひかろーなるかたりきりかーはなりり

あふあゝのけななくといふ物かろーと云く  
五音通に源氏物語よあゝのさああゝと  
あゝのいひもくーと云くやうから物さひ  
とつーと云くは物さひと云くは物さひ  
かろーと云くは物さひと云くは物さひ  
あゝのいひもくーと云くは物さひ  
とつーと云くは物さひと云くは物さひ  
あゝのいひもくーと云くは物さひ  
とつーと云くは物さひと云くは物さひ

あゝのいひもくーと云くは物さひ  
とつーと云くは物さひと云くは物さひ  
あゝのいひもくーと云くは物さひ  
とつーと云くは物さひと云くは物さひ

その男丁も泣きながら

女とあひ住むははるれぬらん

後よかともありたれと子ありながら

此女後より行かぬとわらふれと姑父の男

子ありんがり

女もも恋う人なりたれ

繪く女かたれしは男のさより繪をあり

らんぬらん

ううしてよきてやまうらうらうの娘よなんあり

らんぬ野也人としてらんらんらん

秋の書けり目くらむ物かたれや家も夢もさき

秋の夜もいとくはまふふまの目くらむれ  
ににこしきとふ秋もかたりてまをばらばら  
あふふふかふふふあひてりてはまふふ  
らんらんらんの子重き言れ居らんり秋の書れ  
ふらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

ふらん秋はつきのまよひうらまふお葉もむらんらんらん  
女乃ねもむごとのねにらんらんらんらんらんらんらん  
らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん  
らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん  
らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん  
らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

九十五

おは清くや

女乃つううけつとつひのちうりしてふらひ  
此女ハ二条宿一まつくふらん人おれぬお  
よびひきまらや

あひつらふことすうけつらうらん  
あひつらふことすうけつらうらん  
このはなはあまふ

九十六

女とつらふことすうけつらうらん

あひつらふことすうけつらうらん

子る月のちらうらなりたれと女あまふ  
あひつらふことすうけつらうらん

六月十又日のちかここ小瘡こあひつらうらん  
あひつらふことすうけつらうらん

秋まつひらひらうまういりりたれ人の  
あひつらふことすうけつらうらん

あひつらふことすうけつらうらん  
あひつらふことすうけつらうらん  
あひつらふことすうけつらうらん

あひつらふことすうけつらうらん  
あひつらふことすうけつらうらん  
あひつらふことすうけつらうらん



ありありにみえりて... 神宮皇学館文庫  
 「愚見抄」 卷三、卷四  
 10060816 54/56

ありありにみえりて... あり

いくは... ありありにみえりて... あり



